

高槻シティハーフマラソン 30 回記念企画



主催：高槻シティハーフマラソン実行委員会

後援：高槻市 高槻商工会議所 (公社) 高槻市観光協会

期日：2021 年 12 月 4 日

会場：高槻商工会議所 大ホール

「特別座談会」

— 市民マラソンの目指すもの —

パネリスト	関西大学人間健康学部教授	西山哲郎氏
	全国ご当地マラソン協議会代表	古賀浩之氏
	和歌山ジャズマラソン	池田真奈美氏
	高槻シティハーフマラソン実行委員長	桑内義和
司会進行	高槻シティハーフマラソン事務局長	高橋正



本日のテーマは「市民マラソンの目指すもの」です。



高橋：本日の進行をさせていただきます、事務局の高橋です。本日は「市民マラソンの目指すもの」というテーマで、それぞれ皆さん方からご意見をいただきたいと思います。それでは皆様方のご紹介につきまして、本日は「さん」付けでご紹介させていただきますので宜しくお願い致します。まず初めに関西大学人間健康学部教授であられ、スポーツ社会学を専門に研究をされておられます西山哲郎さんです。続きまして平成 27 年に高槻シティハーフマラソンと相互協力の覚書を交わし、ランナー交流や情報交換をさせていただいております和歌山ジャズマラソンからお越しいただきました和歌山市スポーツ振興課・池田真奈美さんです。よろしくお祈いします。そして全国の地方マラソンの魅力について様々な PR 活動をされておられます「全国ご当地マラソン協議会」の代表であられます古賀浩之さんです。次に高槻シティハーフマラソン実行委員会委員長の桑内義和さんです。よろしくお祈いします。それでは本日のテーマは「市民マラソンの目指すもの」でございます。まず初めに高槻シティハーフマラソン、それから和歌山ジャズマラソンについて少しお話をいただいて、そして

大阪マラソンについて、これまでの調査・研究をされた中でその特徴的なものをお話下さい。そして全国の地方マラソンの特徴も色々だと思います。お話をいただいてご意見を交わしながら、今日のテーマであります「市民マラソンの目指すもの」の方向性を頑張って見出したいと思っております。非常に限られた時間ではございますがどうぞよろしく願い申し上げます。

高橋：では初めに桑内さん、高槻シティハーフマラソン、ここはちょっと違うよというようにご紹介下さい。

高槻シティハーフマラソンは「民活・自立・共助・公助」。ランナーはじめ関係者の声に素早く反応し改善改良を繰り返す。



桑内：桑内と申します。よろしくお願いいたします。われわれの高槻シティハーフマラソンが他のマラソンとちょっと違うなというところはですね、端的に申し上げますと、いわゆる民間でやっているというところです。高槻という所は結構、イベントがたくさんありまして、それぞれに発信力のあるイベントでして、みんな民間の人が出てきてやっているという部分であります。それに上手に行政が支援をしてくれているというような関係で成り立っているというところが一つの特徴であると思います。そしてもう一つは先ほど映像をみていただきました通り、オンラインの大会も含めて今年で30回目をやるわけです。東京マラソンよりも早く始まっていますので、マラソンブームが来る前からこの大会を始めているという特色がありまして、いろんな経験の蓄積があるというのがわれわれ実行委員会の特徴であると考えております。

高橋：ありがとうございました。本日もお見えになっていますが市民団体が運営主体というのは全国的にも珍しい、レアケースだと思うんですが、そういった中での利点というのはどういう事があげられるんでしょうか。

桑内：民間団体が直に運営をしているというところで、意思決定がシンプルで早く決められるというのが一番の利点だと思います。これはいい例だと思うんですが、2018年の大会だったと思うんですが、この時に医師会さんの方から色々ご指導をいただきまして、その中でAEDの設置箇所についてご指導をいただきました。なんで医師会はこんな意地悪な事を言うのかなと私は思っていたんですが、事故が多いのはゴールまでの2キロ圏内。2キロ圏内に集中してAEDを置きなさい。それも10台近く置きなさいというような指導を受けた記憶があります。そしてそれに対応いたしました。次郎四郎橋をご存じですよ。次郎四郎橋がちょうどゴールまで2キロの所にあります。そこからAEDの設置をしました。そ

うしましたらその翌年にランナーがそこで心停止を起こしました。そのAEDがまさに役に立ってその方は蘇生され、社会復帰も果たされました。医師会の指導とそれを聞き入れたわれわれの判断は非常に良かったと今でも感じております。

高橋：様々なご指摘をいただいたことの実践で成果が出た。成果というんでしょうか、そういう報告でした。シンプルイズベストと言うんでしょうか、結論まで決めるのが非常に早いというのが特徴でしょうか。他にも事例が何かありますか。

桑内：そうですね、結論まで決めるのが早いというのはそういう事なんですけど、私が実行委員長になりましたもう8年になりますが、実は私が受けた時は市道の一部の所の信号がございまして、信号にあわせてランナーを止めていたと。車を止めるんじゃないんです。ちょっとそんなマラソンはないだろうということ。それはさすがに具合悪いという事で、途中で距離を伸ばして競技場の手前にゴールを変えました。その場合、ランナーは止まらずに帰って来られるのでタイムもきちっと読めるんですけど、その場所から更衣する競技場まで500メートル位歩いて戻るので、これはデメリットな部分ですが1月開催のため低体温症の心配があったりします。そこはボランティアの皆さんにご協力をいただいて、中間辺りにエイドスペースを作ってつないでいるというふうになっております。こういう事も事例としてはあります。

高橋：ランナーストップの話も出ましたけど、これまでランナー含めての関係者からの声をくみ上げるというのでしょうか、それが実行実践できているところなのでしょうか、まあいわゆる、よくいうPDCAですね。そういうチェック体制が上手くいっているというふうに捉えていいのかなと思います。そういった取り組みについて何か反応みたいなものはありますか。

桑内：そうですね、初めて大会に参加されるランナーの方はあまりお気づきにならないかもしれませんが、毎年、リピーターで参加しているランナーの方はたくさんおられます。毎年、アンケートを取っていますので、今年は何か変わっているなあ。ここが変わっているなあ、という事を具体的にあげていただいています。やった方もそういう反応がありますので大変、やりがいがあります。改善をして良かったと、自分たちの励みにもなっております。

高橋：リピーターの参加者からの反応があるという事で、その一つのあらわれが募集定員をまだ割っていないところかなと思います。私ども運営サイドからしますと、募集をかけた定数に届くかどうかというのは、実は非常に気になってしまうんですが、それがいつたい何日目に届くのだろうかとか、それが一つのバロメーターのようになってしまって、そういうところは高槻シティハーフマラソンは今、桑内さんがおっしゃったように、いろんな

ランナーからの反応も頂戴しているという事でいいのかなと思います。それから市民団体間ですね、今日お見えの皆様方の調整みたいなものは上手くいっていると言えますか。

桑内：そうですね、その部分については大変うまくいっていると私は思っています。42団体の運営はわれわれの共助そのものですので、これを実際に実践いたしまして、これからもいいイベントにしていかなければならないと思っております。出来るだけ色々な情報を42団体の皆様には伝達をいたしますし、色々な問題についてもご相談をしていきたいと思っておりますので、今後ともご協力をよろしくお願ひいたしたいと思っております。コロナ後の大会になりますと、これまでとは違うケースが出てくると思っております。エイドをどうするのか。飲み物をどうするのか。色々な問題が出て来ると思っておりますので、そのような部分も皆さんと協力して運営していきたいと思っておりますのでよろしくお願ひいたします。

高橋：今、共助というフレーズも出ました。よく防災対策などでよく聞くのが「自助、共助、公助」というようなフレーズを聞きますが、それを実践しているのがこの高槻シティハーフマラソンではないかなと思いますし、今、桑内さんがおっしゃった、情報、あるいは相談をしますのでもよろしくという所がこれからも大切な要素だと思っております。ところで今後の高槻シティハーフマラソンの大会ビジョンはどのようにお考えでしょうか。

桑内：大変難しいところですけど、「自助、共助、公助」というのがわれわれの大会のコンセプトと申しますか、一番大事な部分だと思っております。やはりまずこの大会が財政的に自立出来る事。今まではいろんなご支援を賜ってやっておりますけど、財政的にはそんなに楽ではありません。昔はそうではなかったかもしれませんが、今はコロナの対策、それから安全対策というもの。昔の大会からは比べ物にならないほどお金がかかる対策をとらなければ大会は開催できませんので、対策をきちっとやって財政的にも自立が出来るというところを目指したいと思っております。それからこれは公助と言いますか、行政に助けてもらわなければならないのは、マラソンインフラというのがまだ高槻市の中ではそんなに整っておりません。そういう部分についても具体的にいろんな事をあげるときりがありませんが、ご協力もしていただきながら本当にいい大会にしていきたいと思います。ちょうど高槻ハーフマラソンはスタートが市立総合グラウンドということで阪急やJRの駅から、やはり歩いて行くというのはなかなか一般の人たちには無理があります。今はバスで行き来をしておりますけど、こういうインフラであるとか、走っている時のコースの段差が、僅かな段差が問題になるというところがコースにあるんですね。こういうところのインフラというのはわれわれには手に負えませんので、やはり行政の方々から公助の中で助けていただくという事になってくるかと思っております。思う所はたくさんありますけれども、自立と公助が上手くいき、いい大会を作っていきたいと考えております。

高橋： 自立と公助という話も出ました。公助の所でマラソンのインフラという言葉も出ましたが、はっきり言ってマラソンインフラというのはコース設定を含みますね。コース設定においてここを走りますよとは言えるんですが、その使用許可が取れるかどうか。もう一つは交差点にかかった時に、そこを止めてしまった時の迂回路があるかないか。それが非常に大きなポイントになってくると思うんですが。全国、どこまでも道路はつながっていますが、つながっているからなんとかかなというのではなくて、道路にはそれぞれ重量規制はじめ様々な通行規制があったり、あるいは道路の舗装の厚ですね、舗装が何センチ。それによって道路が傷むとか言ってなかなか許可が取れない。そういったマラソンインフラの大きなポイントである法規制等に係る所については、やはり行政の支援がないと絶対に出来ないと思っています。全国のマラソン大会は行政中心の大会というのが、実はこの辺にも原因があるのかなと言うか、主体にならざるを得ない理由だと思ったりもしています。

高橋： では、次は池田さん。和歌山ジャズマラソンの特徴についてお話しください。

和歌山ジャズマラソンは「日本遺産ツーリズム賞」を受賞。次回から和歌山城がスタート地点へ。“誰でも走れる”がコンセプト。



池田： はい。和歌山ジャズマラソンから来ました池田です。よろしくお願いいたします。和歌山ジャズマラソンは名前の通りマラソンとジャズが融合した大会になっています。どんなものかなというのがあると思うんですけど、コースの沿道にジャズのライブステージを設けて生演奏で軽快なジャズのリズムを出しています。それによってランナーはもちろん、観客も楽しめる市民参加型のマラソン大会となっています。そしてマラソンの舞台は日本遺産にも認定されています、絶景の宝庫・和歌の浦を舞台にしております。風光明媚な景色をはじめ、古代万葉の時代から現代まで続く和歌山の歴史と文化を感じられるコースになっています。また、“誰でも走れる”をコンセプトにしております、子どもから大人まで参加できるように、2キロのジョギングからハーフまでの距離の設定をしています。仮装しての参加や、競技用ではない普通の車椅子でのご参加も可能となっています。身近な生活の場にスポーツを取り入れるきっかけになればと考えています。そして、これまでの取り組み等を評価いただきまして、昨年度はスポーツ文化ツーリズムアワード2020の特別賞、「日本遺産ツーリズム賞」を受賞させていただきました。

高橋： いま、サラッと「日本遺産ツーリズム賞」というお話が出ましたが、全国のマラソン大会でそのような賞を取った大会というのはあまり聞かないんですが、和歌山のコースは観光資源の宝庫をずっと走っているような形です。今、スポーツツーリズムについては国の方は、観光庁、それから文化庁、スポーツ庁が盛んにツーリズムについて言われています

が、その見本のようなものかなと思ったりもします。ジャズの話も出ました。ジャズに特化されたのは何か理由があるのでしょうか。

池田：ジャズマラソンというのは市の職員から提案をいただいて事業がスタートしていません。第1回大会が2001年に開催されているんですけども、1900年代の後半頃に海外でエンターテイメント型のマラソンとしてミュージックマラソンが開催されておりまして、ランナーだけではなくて、それを観る観衆も巻き込んだ新型のマラソン大会として人気が出ておりました。その取り組みに感化されまして、日本でもミュージックマラソンを開催したいという思いで開催に至りました。そして、ジャズのテンポがマラソンの少しゆったりしたペースにあいそうだ、という事と、当時市内にジャズプレイヤーが増えていた事から、ジャズとの融合を考えたというふうに資料には残っています。

高橋：はい。分かりました。ありがとうございます。海外のマラソンをヒントにされたということなんですね。高槻も毎年5月の連休に「高槻ジャズストリート」というのがありまして、非常に多くの人を楽しんでおられます。そういった方面でも連携が出来たらいいなと思います。実は、私も和歌山ジャズマラソンは走った事がありまして、何でジャズをいろんな所でやっているのかと、不思議に思っていたんですが、よく分かりました。和歌山ジャズマラソンは走り終えたランナーにすぐに梅干しを渡したり、みかんを渡したり、それからその後は黒潮温泉の割引券でドボンと温泉に入り、気持ちよくなった後に黒潮市場でバーベキューをするという、ちゃんと出来上がっている感じがするんですね。作戦的にはうまく行っていると言えますか？

池田：やはり、地方で開催しているマラソン大会なので地元の事を知って欲しいという思いがすごくあります。参加者の中にはマラソンがないと和歌山に来る機会がないという方も多いと思いますので、そのような方に出来るだけ和歌山の事を知って欲しいという事を心がけております。そう考えた時に、走って終わりではなくて、その前後でも和歌山を存分に体験して欲しいと思っておまして、大会当日は先ほどもおっしゃっていただいた通り、メイン会場にしている黒潮市場でマグロの解体ショーをみたり、バーベキューをしたり、温泉に入っていたりとか、そういう事を体験していただく。そして、それだけではなくて、マラソン大会の当日とその前後の日をあわせて、ゼッケンを見せれば3日間、市内観光施設への入場を優待するなど、そういった事も実施しております。また、飲食店等の特典クーポンも事前に配布しておりまして、マラソン大会をきっかけにした市内周遊に繋がるような仕組みを作っています。この体験を基にマラソンだけではなくて、観光で再度、和歌山に遊びに来てもらえたらと考えております。

高橋：当日だけではなく、前後3日間、色んなクーポンが出ていると。ランナーにとってはゼッケンを見ていただいて様々なプライオリティが高くなるというのは、気分がいいも

のなんですね。そういったものがあるというのは非常に羨ましいな、と思います。様々なコース設定や、そういったPRを含めてやられている事は多いと思いますが、逆に困ったなどというような事はあるのでしょうか？

池田：そうですね。先ほども高槻シティマラソンさんもいろいろお話しをされていましたが、交通規制の問題はあります。次回の開催大会からジャズマラソンはハーフのスタート地点を和歌山城という街中に移す予定になっております。それで魅力がアップした大会になるんですけど、和歌山のメイン通りがコースになりますので、交通規制に伴う市民生活への影響も懸念しております。また、マラソン大会が飽和状態になっているという事もありまして、参加者の確保についても苦慮しているところです。高槻さんは定員を割らないと先ほどおっしゃっていたのが羨ましいんですけども、和歌山ジャズマラソンの方では直近では10,000人に満たない状態になっておりまして、和歌山ジャズマラソンならではの取り組みで更に魅力をアップさせて参加者の確保に努めたいと考えています。

高橋：スタート位置が今現在は和歌山港なんですね。それが和歌山城から予定されていると。今度は和歌山の駅からも歩いて行ける距離ですよ。非常に便利になるなと思いますし、何しろ和歌山城は徳川御三家の居城でもありますから、間違いなく、多くのランナーが参加されるのではないかと思います。それと、先ほどから出ていますが、一番大きな課題は道路使用許可だと思うんですね。市民生活との関係が非常に難しいと思うんですよ。そのあたり、もう少し、お考えはありますか？

池田：コース変更に伴って交通規制の範囲を以前より拡大する予定になっています。また、バスの運行にも影響がありまして、多くの市民の皆様にご迷惑をお掛けすることになります。また、都会とは違いまして、和歌山は車社会なんですよ。主要道路が少ないという事もあって、交通規制の影響は大きいと考えております。影響を少しでも減らせるようにメイン通りの交通規制を短時間で規制解除出来るようにするとか、片側車線、一車線のみを規制して、車が通行出来る区間を出来るだけ増やせるように考えております。また事前に交通規制については自治会長さんにご相談をしたり、住民の方々に周知出来るように、あらゆる手段を使ってご理解ご協力を地道に得ていく必要があると考えています。コロナの影響で新コースでの開催はまだ実現しておりませんが、開催した際の影響を検証して、警察等と協議の上、更に改善していく事が必要だと考えております。

高橋：はい。ありがとうございます。市民生活への影響、市民の皆様にご迷惑をかけるのではないだろうかという一つの懸念とマラソンのコースというのはマラソンインフラそのものですから、これについてはもう少し話を引っ張りたいと思います。では市民参加について伺いたいのですが、私ども先ほど来、42の団体と共にやっていますよという事ですが、

その辺りは和歌山ジャズマラソンの方はどんな感じで動いていらっしゃるのでしょうか。

池田：そうですね、実行委員会自体は35の団体様のご協力を得てやっているんですが、こういった大会にしますという企画については基本的に行政の事務局の方で企画をしております。大会終了後にランナー様からアンケートをとったりだとか、そういう事をしておりますので、希望が多かったご要望については実現する事でより魅力ある大会になるように考えております。直近ではスタート地点での計測の導入も行なっております。また、去年はオンラインでの開催になりましたけど、インスタグラムを活用して一人ではなくてみんなで走っているよ、応援があるよという大会イメージを共有出来るように多くの方にご協力をいただきました。もう一点、ボランティアについては一般の方から募集を行うとともに企業からもボランティアを出していただいています。ボランティアさんについては受付とか参加賞の受け渡し、給水業務など、ランナーの皆さんと触れ合える所に配置をして業務をお願いしています。

高橋：ありがとうございます。今、インスタグラムなどの紹介もありました。和歌山ジャズマラソンはFMラジオなどでもよく大会の告知をされていますよね。そういった告知力は凄いなと思っています。私どもはラジオを動かす力はないので羨ましいなと思っています。ちょっと話は変わりますが、今年度も和歌山ジャズマラソンも中止を決定されました。コロナの問題ですが、after コロナになるか with コロナになるかちょっと分かりませんが、そういった次の大会へのイメージというのをどのようにお考えでしょうか。

池田：去年は募集を開始する前に大会中止を決定いたしました。和歌山ジャズマラソンは毎年11月の第2日曜日に開催しているんですが、今年はランナーの募集を一旦、やったんです。やったんですけど大会の2カ月前に中止を決定いたしました。今年度、募集を開始した時には秋にはコロナの感染状況も落ち着いて開催できるかなと考えていたんですが、夏に爆発的な感染拡大ということで、大会運営に不可欠なボランティアさんや医療従事者さんの確保が難しく、安心安全な大会運営の十分な状況を整えることが困難と判断いたしまして、残念ながら中止を決定いたしました。現在はコロナの新規感染者数は落ち着いてきていますが、また新たな株が出てくるなど、いつ感染拡大がおこるのか全く誰も予想できない状況には変わりはないと考えております。マラソン大会というのは開催の数カ月前にエントリーをする場合が多く、大会当日のコロナの状況が分からない中で、エントリーを躊躇うランナーの方が多いのではないかと予想しております。それは遠距離の大会になればなるほど移動に伴う交通費であったり、宿泊の手配とか、そういうことを考慮してエントリーをやめようかなと考えるランナーさんが多いのかなと考えていまして、こういったランナー離れをどのように防ぐかという事を今後、考えていかなければいけないと考えております。

高橋：コロナがいろんなところへ影響を及ぼしているというのは、当然、全国すべてについて言えると思うんですが、私ども一番痛いのはランナーが大会から離れていくというのが一番厳しいと。いろんな意味でこれは全国的な課題だと思います。今後、益々、和歌山ジャズマラソンさんと連携を深めさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

高橋：さて、西山さん、大阪マラソンなんですけど、西山さんは直接、運営をなさっているのではございませんが、スポーツを通じた地域振興の研究をなさっておられて、大阪マラソンの調査にも色々関わってこられたとお伺いしています。大阪マラソンの特徴などについて少しお話いただけますか。

大阪マラソンは「名所巡り」と「勝手にアメちゃん」で成功。市民マラソンは参加者それぞれがストーリーを作れる。



西山：はい。了解しました。ちょっとパワーポイントを使わせていただきます。2011年に大阪マラソンが始まった時から8年間、ボランティアの方とランナーの方と沿道で応援している方の調査をさせていただきました。皆さんもご存じの通り、まず東京マラソンが2007年に始まりまして、こういう都市型市民マラソンというものが全国で人気になりました。2011年に大阪マラソンが始まっているわけですが、そのほぼ同時期に奈良とか神戸とか京都も都市型市民マラソンを開始されています。ある意味、日本の都市のどこでも、名の知れた都市はみんな市民マラソンをやるとというのが2010年頃からの流れという事になっております。その中で当然、埋没しないように特色を出さないといけないのですが、まず一つ目の特徴の出し方として、ここに大阪マラソンのコース図が出ておりますが、高橋さんからもマラソンはコース取りが命だというお話もありましたけれども、実際、大阪城をスタートするというのが第1回から、大阪人は大阪城だろうという事でスタート地点に選ばせてもらっています。その後、中之島の公会堂であるとか、日本銀行の所であるとか、大阪ドームとか、ちょっとここには載っていませんけども第1回目は通天閣も無理やり通らせてもらったというところがあります。都市型マラソンはやはり交通規制という問題がやはり大きいので、こういう名所を巡るとするのは口で言うのは簡単ですが、なかなか実現は難しい所があります。これは別に私が頑張ったわけじゃないですけど、多分、企画された橋爪紳也先生とか、いろんな方がご苦労されて、こういう名所を巡るコースをつくる事が出来たというのが大阪マラソンの一つの特徴であり他の大都市の市民マラソンに負けないようにこういう努力をされてきたように思います。

もう一つポイントとしましてはボランティアの方、これは公式ボランティアの方ももちろん頑張っているわけですけど、勝手にボランティアをして下さる方が街中に

いらっしゃるんですね。私の知り合いも平野区で勝手にエイドを作って勝手にアメちゃんを配っていると言っていましたけど。あれは正式には問題があって、勝手に食べるものを配るのは本当はあかんで、大阪マラソンの正式な組織としてはやめてくれと言わざるを得ないんですが、実は勝手にやっている人が結構いらっしゃるわけですね。でもやはり市民が自主的にエイドを始めるとするのは他の都市ではなかなか見られない現象だという事で、参加されたランナーの方には非常に好評で「あそこにエイドがあったけど、あれ何だろ？」と不思議に思う方もいらっしゃるようですが、そういうホスピタリティという面で大阪マラソンは成功している所があるのかなと思います。それはもちろん大阪の名所を巡るコースであるからこそ、市民は大阪を外から来た人に知ってもらいたいというような機運が盛り上がったのかなと感じる所がありました。

それ以外にもう一つはチャリティという事に第1回から力を入れていて、一般ランナーの方も確か500円分でしたか、7つのチャリティの項目があるんですけど、そのどれかを選んでいただいて大阪マラソンに参加すると自動的に、例えば環境問題、水資源の問題に500円寄付しますとか、そういう事が自動的に出来るようになってきているというのは、これはまた第1回からの特徴として大阪マラソンが持ってきた所だと思います。その中で、先ほど調査してきましたというお話をしましたが、やはり参加しているランナーの方がどう思うかで走ってらっしゃるか。これだけ全国2千数百カ所、ハーフマラソンを加えてマラソン大会をやっているけれども、大阪マラソンに参加されている方はどういう思いかなというのを自由記述でアンケートを答えているものを見ると、もちろん「サブ4を目指します」とか「東京でサブ4を決めたから次は大阪でもサブ4を決めたい」という競技志向の方ももちろんいらっしゃるんですけども、印象深かったのは、家族が大病をされていると、苦しんで頑張って闘病生活を過ごしていると、それに対して助けてあげたいけど自分は何もできない。そのような中で自分もマラソンを走って、直接助けにはならないけれども42.195キロを走る事で自分も頑張っているよという、そういう元気を伝えたいというふうに、自分のストーリーで大阪マラソンに参加されている方が結構いらっしゃるんですね。大阪マラソンではないけど別の大会で私の大学の後輩が彼女となかなかうまくいっていないと。どうしようかという時に彼女と二人でハーフマラソンに出たと。二人でハーフマラソン、20数キロを並走して並んで走って、結局そのマラソンを機会に別れる事になったんだけど、そのマラソンをきっかけとして二人で「これまでの時間をありがとう」と言って、まあ笑顔でとまではいかないけれども、スッキリ別れる事ができたと。だからいろんなストーリーがあるんですね。

市民マラソンの参加者は競技志向だけではなくて、いろんな思いで参加されている。そのためストーリーが作りやすい大会というのが多分、市民マラソンの中では人気が出て来るんじゃないかなあと思いました。大阪マラソンの場合はコースの取り方であるとか、沿道の応援というの、先ほどジャズマラソンのお話もお聞きしましたが、例えば京セラドームのところは昔から沖縄から大阪に出て来た方が沢山お住まいになっている。その伝統を踏

まえてか、沿道で沖縄のエイサー、沖縄民謡を流して踊りながら応援してくれたり、そういう地域地域で、ここはそういう所なんだという事が沿道の応援のパフォーマンスで分かるとか、そういう事が色々と仕掛けられているのがいい所なのかなあと考えております。

高橋：はい。ありがとうございます。競技だけではないですと。マラソンにはそれぞれのランナーがそれぞれのストーリーをつくる事が出来るんですよというご説明かと思います。西山さんが全国の色んな調査・研究の中で、今、大阪マラソンのお話をいただきましたが、それ以外のマラソンでもこういう事を知っているよというのがあればご紹介下さい。

西山：大阪マラソンの調査とは別に2015年から4年ほど先ほど名前が出ていましたけど、増田明美さんと一緒にマラソン研究会ということをやってきました、増田明美さんがやっているのは彼女のご出身地の千葉県・いすみ市という所の「いすみ健康マラソン」ですね。そのお話をだいぶ聞かせていただきました。いすみ市は千葉県といっても外房の方なので、それほど人口は多くない。増田明美さんのご実家はミカン農家らしくて、「いすみマラソン」の時、ご両親がみかんを配ってらっしゃると言われていました。面白いのは沿道で応援する人を出したいけど人口が少ないからそうもいかない、それでどうしたかという、沿道に案山子を並べて応援の旗なども立てて盛り上げているんだという話を聞きました。高槻とか大阪とはまた違う環境ですけども、色んな事をご苦労されて、工夫されて盛り上げてらっしゃるんだなという話が印象に残っております。

高橋：ありがとうございます。高槻は案山子を立てるほどではないんですが、楽しいお話でした。西山さんには後ほど本題の研究課題のお話も頂戴したいと思います。ちょっと次に進ませて下さい。

高橋：では古賀さん、本日はわざわざ東京からお越しいただきました。本当にありがとうございます。古賀さんは初めにご紹介もさせていただきましたが、全国の地方マラソンの状況をほぼ掌握されていると。その中で「全国ご当地マラソン協議会」を創設なさった動機みたいなものをまずお話いただきたいと思います。

都市型マラソンとの一線を引き、ご当地の良さを応援する。そして大会間の連携をネットワーク化する。全国のマラソンは「物から心」へ変化してきている。



古賀：「全国ご当地マラソン協議会」という名称なので、都市型の大阪マラソンとか東京マラソンのようなメガ大会とは一線を引いて、地方の自治体もしくは体育協会、観光協会など関連団体がそのご当地の良さを出している大会を、積極的に応援する趣旨で活動しています。私は現在、あるスポーツ新聞社に属していますが、マラソン事業を90年代から主催、後援事業

として今まで約 30 年間、携わってきました。そこで驚いたのは大会事務局の人たちがびっくりするくらい他大会の連携や情報共有がない。つまり、すべて自前でよその大会がどういう運営方法で開催しているのか、となり町のマラソン大会ですら担当部署、担当者も知らないということが当たり前でした。担当者もいろいろな大会に視察に行っているものの、交流が全くないため運営の内情は全く分からないということがほとんどでした。そこで 2001 年、私が携わっているマラソン大会をだけを集め、情報共有を兼ねた「マラソンサミット」という勉強会を始めました。以降毎年、都内で開催していたのですが、そこでは大会の情報開示と改革に向けた活発な意見が出され、それが徐々に評判になり、どこで聞いたのか、我々が関わっていない大会事務局までもが勉強のために参加させてほしいという要望が増えました。最初は 10 大会くらいで始めた勉強会も 10 年もしないうちに 30 大会を超える大きな組織になりました。この間、東京マラソン開催のような大きな追い風があり、2000 年後半から急にマラソンブームが到来したことも背景にあります。そのような地道な活動を観光庁が評価して頂いたことが、「全国ご当地マラソン協議会」設立の転機になりました。2010 年代前半、観光庁は外国人誘致のインバウンド政策に本腰を入れ始めた時期で、2020 年まで年間 4 千万人にするという大目標を掲げて、その中でこのマラソン大会のコンテンツは国内誘客事業、そしてインバウンド誘致に関して重要なコンテンツとして位置づけされたのです。その後、観光庁関係者からの勧めもあって、この活動を組織化しないかと打診されました。当時、私が取り組む本来の新聞社業務とは少し外れますが、ある程度の補助もあったので 2017 年、「全国ご当地マラソン協議会」の設立を会社に認めてもらいました。私としては何よりも社会貢献、そして地方活性化に寄与できることが光栄で、その間、コロナ禍などいろいろありましたが、今年で設立して 5 年目になりました。

高橋：ありがとうございます。今、都市型マラソンと地方のマラソンの一線という問題であるとか、地方マラソンがあまりにも横の連携が出来ていないと。その通りなんですよ、実は。凄く大会そのものが閉鎖的なんですね。限られたランナーの取り合いをするわけですから、あまりいい情報は隣には教えたくない、ものすごく恥ずかしいけれども、小さな心の持ち主になってしまっていて、良くないなあという中でこういった「全国ご当地マラソン協議会」に連携を作っていただいたと。私どもは和歌山ジャズマラソンさんとの関係は実はそういう事もあったんですね。同じ府県内では連携をとるのは嫌だけど、府県を跨ればそんなにバッシングしないだろうという思いもあったんですが、それを更に大きくなされた協議会の考え方というものは非常に有難いと思います。そういった状況をもう少し関係者がしっかりと認識しなければならないと思ったりもします。マラソンそのものが東京は 2007 年からすでに 15 年も経ちまして、若干ブームが冷えてきている部分もありますし、地方によってはマラソンがなくなっているという事も聞いたりします。一つ伺いたいと思うのは行き過ぎたサービスによるランナーの取り合いですね。そういったものについてこれからどうなっていくのかと思うのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

古賀：確かに大会が乱立してランナーの目がかなり肥えてきています。ある大会ではこういうサービスを受けたとか、いい参加賞を貰ったとか、金銭的な部分も大きく左右されます。またコースの環境面では如何ともしがたい話ですが、坂が多くてタイムが出づらいつか、走っていても田んぼばかりで殺風景ということも大会評価の対象になることもあります。そういう意味ではあらゆる環境が差別化の対象になるわけです。ある大会では参加者におにぎりを配ったり、高級名産品をエイドで提供したりと評判のいい大会はある意味、体力勝負になっています。地方の大会でも自治体の予算が大会運営とは別に 1000 万円を超えている大会もあります。こういう大会が評価されるのは致し方ないですが、最近はそのような物質的な部分だけでなく、ランナーが感じる心の部分が高い評価を受ける傾向にあります。実際、サイトに書き込まれている評判の大会は、ほとんどが大会のスタッフの対応が非常に良かったとか、地元の沿道の応援や自前のエイドステーションに感激したという意見が数多く見られます。実はランナーもそういう所をよく見ている、そうやって地元一体で応援してくれることがすごく嬉しいようです。このように最近では物から心の部分を評価されるようになってきたので、これからは大会事務局の腕の見せどころかもしれません。

高橋：物から心へというお話ですが、私どもにとっては非常に心強いですね。今までランナーの方とお話をしていると、どここの大会はどうだと、すぐに比較をされて、ここはあれが無いとか、あまり嬉しくないようなお話も沢山あったりして、行き過ぎたサービスというものが結果的には事業費の高騰につながって行って、当然、支出が膨らんでいきます。費用対効果も悪化するし、大会が 2 千数百、今、あるわけですが、それが衰退していくのではないかと思ったりもします。その中で古賀さんのご意見では、ランナーは物から心へと、地域地元一体型の方に評価が変わりつつありますよというようなお話でした。これはランナーの意識が少し変わってきたのかなと思います。

ここで話が変わりますが、和歌山ジャズマラソンの所で池田さんからツーリズムのお話が出ました。ちょっと勝手な話なんですけど、私ども地域のマラソンでは一地域だけで海外の選手を呼び込む事というのはなかなか出来なくて、ノウハウも持っていませんし、そういったことが上手くいっているのは代表的にはホノルルマラソンですね。JALとJTBなどが一緒になって呼び掛けて、ホノルルマラソンは本当に多くの日本人が参加して成功していると聞いておりますが、逆に全国ご当地マラソン協議会の方で全国の地域のマラソンを一括して、それをいわゆるツーリストに渡して、ツーリストが逆に海外のランナーの受け皿になっていただくというような仕組みを作っていただけないかなという、あつかましい意見はいかがですか。

古賀：ホノルルマラソンは今月、開催です。今の入出国の審査で現地の事務局はかなり大変な思いをしていると聞きました。元々、ホノルルマラソンに関しては毎年 1 万人上の日本人がエントリーしていて、約半数近くの参加者が日本人ですが、今回に限っては 1000 人以

下のエントリーだったそうです。しかも日本から行こうという人はコロナ禍で大多数が見送っているのです。今回、日本人で参加されるのは、ほぼ現地の日本人のみかもしれません。ホノルルマラソンとしてはオミクロン株の発症で最悪なタイミングに当たったようです。実はホノルルマラソンは競技とは別に、何かを記念にして出ている方が非常に多いのが特徴です。世界中のマラソン大会でそういったモチベーションで参加している人が最も多いのがホノルルマラソンだと私は思っています。それは自身の人生の転機、つまり卒業、結婚、出産、就職、転職、昇進、定年、離婚、還暦など人生のターニングポイントになるときにホノルルを走ろうみたいな流れで出ている方が非常に多いからです。フルマラソンどころか10キロも走ったこともないような人が大勢、何故かわざわざホノルルまで行って走るという不思議な現象が起こります。だから大会が終わった翌日のワイキキ通りは足を引きずっている日本人がいっぱいいます（笑）。このようなホノルルの事例はいいヒントで、ご当地マラソン協議会もこういったモチベーションをランナーに提供して売り込めないか、常に考えています。これは日本人だけじゃなくて外国人も含めてです。全国ご当地マラソン協議会には協力団体としてJTBも参画しています。設立当初からJTBには協力して頂き、特にインバウンドで東南アジア諸国はJTBの現地営業所を使って、中国、台湾、タイ、シンガポール、マレーシアのランナーを誘致する施策を行ってきました。大会も外国人を受け入れてくれる事を前提に募集します。実は3年前、加盟大会の1つである山梨県の山中湖ロードレースで実証実験をしました。外国人に一番分かりやすいのは富士山なので、富士山の麓の山中湖ロードレースは格好の大会でした。この時はJTBがアジア諸国に声をかけて約50人の新規外国人をインバウンドで獲得する事が出来ました。前年はゼロだったのでかなり効果があったと思います。しかももっと驚いたのは、東京、大阪のような大都市マラソン大会に参加する外国人はまだ大会慣れしていないような人が多いですけど、わざわざ日本の地方大会に参加する外国人はかなり旅慣れている人が多くて、現地集合、現地解散とかなり荒っぽい形で募集を行いました。当日は現地まで羽田空港から来られるのかと心配しましたが、みんな何の迷いもなく新宿まで行って、そこから高速バスに乗って山中湖まで来ていました。しかも当日はJTBが専用窓口で対応したため、大会事務局の負担は一切かかりませんでした。理想的な外国人ランナー獲得の施策でした。コロナが明けたらきっとGO TOを含めてインバウンドもますます推進していくと予想されます。こういう活動も徐々に再開するつもりなので、高槻シティハーフマラソンもそういう狙いがあればご協力いたします。

高橋：はい。ありがとうございます。実現しそうで楽しいですね。マラソンが単に走ってタイムを縮めたいというだけではなくて、人生の転機に様々な大会に出て、それを契機に何々しましょうというような対象であるというのを知らなかったですね。そういった事も意識しながら運営にも関わっていきたいと思います。いわゆる都市型マラソンと市民マラソンは違いますよという事ですが、私も高槻シティハーフマラソンは日本陸連のRunLinkに加盟させていただいています。いわゆるガイドランスなんかはあるんですが、細か

い地方版にはなっていないで、なかなか対応しにくいなあと思うんです。そのあたりは今後、益々、ご当地マラソン協議会が大きくなっていった欲しいと思うんですが、そのあたりの展望はいかがでしょうか。

古賀：今後の展望は、元来、全国ご当地マラソン協議会のコンセプトにある大会間の連携をネットワーク化するというをさらに強化するつもりです。新規加入大会も含めて、まずはお互いが顔見知りになってご縁を作って頂き、そこから大会情報の共有、つまり成功事例、失敗事例も含めてお互いに情報交換を経て、より健全な大会運営を目指して頂きたいと思います。今回の高槻市と和歌山市の大会の連携のように、相互PRが出来る機会や大会をどんどん増やしていくというのもわれわれの役目です。そこから関係が深まって姉妹レース、それから都市間も姉妹都市、さらに今、災害があちこちで起こっていますので、何か起きた時に助け合えるような行政間の災害協定のようなことまで実現できたら素敵なことだと思っています。

高橋：ありがとうございました。益々、私どもも頼りにしていきたい団体でありますので、今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございます。

高橋：さて西山さん、先ほどもちょっとご紹介いただきましたが、いわゆる都市型マラソンと私ども地方の地域マラソン、市民マラソンとは実は全く違うと思っております。しかしながらマラソンという一つのイベントにはどこか共通項もあるのではないかと考えています。西山さんからこれまでの研究をなさっておられる中でいわゆる市民マラソンに期待するものというんでしょうか、そういうものについてお話を願えないかなと思いますが、いかがでしょうか。

競技指向から幅広い充足感への転換。大会参加者はランナーだけではない。

西山：最近、私は大阪マラソンだけではなくて、マラソンの歴史自体を日本の中でどう展開してきたのかという事を調べているところがあります。それで昔の話は時間がかかるのでやめておきますけれども、今回は来年2月に大阪マラソンとこれまで琵琶湖でやっていたびわ湖毎日マラソンが統合されるという事があります。このびわ湖毎日マラソンは1946年（昭和21年）に大阪で始まった大会なんですね。先ほど見ていただいたコース図に毎日新聞社だけ本社の所に星印を付けておいたんですけど、何でかと言うと大阪マラソンとびわ湖毎日マラソンの統合という事をお話したかったからです。何で統合されたかというのは、まあ色々な理由があるわけですけど、一つにはびわ湖毎日マラソンは、今回で廃止になってしまった福岡国際マラソンと並んで、ある意味で日本のマラソン界を牽引するような権威のある大会だったわけですね。その二つの大会が同時に姿を消すという危機的な状況にあるわけです。これは市民マラソンの危機ではなくて競技マラソンの方の危機ではある

んですけど、それをびわ湖毎日マラソンについては大阪マラソンが合併をして救済するような形になっています。これはどういう事かと言いますと、要はこれまで日本の中でマラソンというのはメダルが期待できる競技だった。2000年代に入っても女子が金メダルを取るような、野口みずきさんとか先ほど出てきましたけど、そういう競技だったんですね。けど残念ながら昨今の状況としてやはりなかなかメダルが期待できる競技、日本人が勝てる競技ではなくなってきたということもあるのかなと思います。もう一つは関係者の方がいたら申し訳ないですけど、新聞社がこれまでマラソン事業を後援されてきて、かなり持ち出しで頑張っていて牽引してきていただいていたところがあるんですが、2000年代、インターネットの発達等で特に地方では地方新聞社が主催していたマラソン大会ってすごく沢山あったんですけども、それが新聞社ではなくて地域でやっていく形に変わったりしております。残念ながら廃止された大会の中にはおそらく地方新聞社が主催されていた大会があったんじゃないかなと思います。じゃあ、この市民マラソン中心の時代になって、やはり競技志向だけではやっていけない状況がわれわれの前にあるという事を考えると、先ほど言いましたように市民ランナーの中にも競技志向で「サブ4をやるんだ」「将来はサブ3だ」なんて事を言っている方は、もちろんそれがコアサポーターというか、コアランナーとしていらっしやって、全国の大会を巡って記録を狙っている方もいらっしやるんですけど、それ以外の大勢の市民ランナーの方は色々な物語を自分なりの物語をそこに持ち込んで走っていらっしやる。たとえばこういう方がいらっしやるんですけど、愛知県の方で退職された後、地方マラソンを回っていると、地方マラソン大会で何をしているかという、単に走りに行くだけではなくて、その地域の歴史を調べるのが楽しみで、ハーフマラソンなどの大会でその地方に行ったら、その郷土資料館に行ったり、図書館に行ったりして、とうとう本を一冊出された方が愛知県の方にいらっしやいます。色々なストーリーというのは自分個人のストーリーもあるけど、その場所に行く事によって啓発されるというか触発されてストーリーが紡ぎ出されるという事もあるかと思しますので、市民ランナーの期待する物語というものは必ずしも競技だけではないよと。そういう視点でこれからは市民マラソン大会というものを見ていただいて、育てていかれるのが大事になってくるのかなと思います。

高橋：はい。分かりました。色々な形でマラソンランナーの関わり方というものが出て来るという所ですが、これまでの競技、マラソンで言えばエリートマラソンがマラソンの大会のようなイメージがあったのが、やはり変わってきたんだなというふうに思います。これから私どもがどういう所に関心を置かなければならないかということもありました。今日のお話をまとめていかなければならないのですが、座談会から言えば、ランナーは一般市民ランナーも公道を走れるわけですから、非常に気分がいいと。これはマラソンを開催する上で“強み”になりますね。ところが近隣の人はそういうふうなマラソンで交通規制をされる事は嫌ですよ、迷惑ですよと。これはマラソン開催においては“弱み”になるかなと。もう一つは交通規制をハーフで20キロ、フルは40キロかけるわけですから、すごい距離なんで

すよね。規制をかけている距離が。それが意味“脅威”になるかと思うんですが、私も、注意しなければならないのは、当然これは“まちおこし”ですよという意見もひとつありますし、“経済効果”もあるんですよというふうな事もあります。東京マラソンで一気に“華やかさ”も出たりして、そういった事がいっぱい期待できる“だったらやりましょう”というので全国のマラソンブームが出て来たと思うんです。私は、非常に大切なのは“運営サイドがやれば勝ちだというものではない”など、そういうふうに思っていて、そのあたりはどうでしょう。要は一番基本的なことが片方では強みであり、また片方では弱みであり、でも規制は絶対にかけないと成立しませんから、そのあたりの整理みたいなもの、どのように取り組めばおさまるのかなと思うのですがいかがでしょうか。

西山：私よりもここにいらっしゃる皆さんの方がご苦労されているので、簡単にこうしろということは申し上げにくいですが、大阪マラソンの経験から話させていただくと、自分の街のいい所を知ってもらえるというふうを感じる所があったから勝手にエイドをしたりとか、あるいは大阪マラソンの面白い所は沿道で応援している方が仮装しているというのが特徴で、これはなかなか他のマラソン大会ではないです。ランナーが仮装している方は結構どこでも市民マラソンでは見かけますけど。大阪マラソンは応援している人が参加できているところがいい所かなと思います。参加できているから交通規制の問題ですとか、色々不便が当然その1日はあるわけですが、許容出来ていると。ランナーだけではなくて応援する人も参加出来ている感じがあるのがこういう、先ほどお見せしたような名所を巡るコースが出来る一つのポイントになっているのかなというふうに思います。

弱みを強みに変えて地域一体化、そして持続可能な大会へ

高橋：ありがとうございます。要は見ている人が参加するというのは、先ほど私が申し上げた近隣の人は迷惑で弱みと申し上げました。その弱みを強みに変えていくという所が非常に重要なんだろうなというふうに理解しました。そのためには丁寧な説明というのは勿論ですが、地域一体化というんですか、そういった形にならない限りはこういった大会が、持続可能な大会になっていかないだろうと。地域一体化するためにはやはりそういった、今は嫌だけどという人達に対して心をもって接して行って自主的に「アメちゃんどうぞ」というような姿勢に変わっていただく、そんな地域を巻き込んだ一体化というのが大切なんだというふうに思います。もう少し費用対効果の問題とかボランティアの問題とかマラソンが抱える共通した課題について色々皆さんからご意見を頂戴したいと思っていたのですが、時間も来ておりますのでこれで終わりにしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。